

～雪の動物園と黒鳥～

小 松 守

（秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長）



昔、雪国の人々はどちらかというと静かに春を待つ思いが強かったのだろうが、地域ごとに様々な特徴的行事を行うなど、楽しみながら過ごしてもきた。社会の変化や暖冬化などもあって、今は秋田の元気のためにと、様々な冬の行事を観光資源としても発信し、頑張っている。

大森山動物園も、冬の秋田の楽しみにしたいと、平成18年から「雪の動物園」と銘打ち冬季開園を行ってきた。最近では秋田の冬の風物詩的存在としても評価されるようになり、今年も多くのお客様に楽しんでいただいた。今回はその冬の開園にまつわる思い出話だ。

動物園ができた頃の営業は4月から11月末までの8カ月間で、12月から翌春3月末までの4カ月間は千秋公園時代の営業に倣い、園を閉じていた。開園当時の大森山の積雪量は平地と比べ多く、園に通じる道路も狭く、除雪状態は決して良くなかった。積雪の多い朝の通勤で大変な思いをしたこともしばしばであった。

「動物園の職員は冬に閉園したらどこで仕事をするの？」と冗談めいて言われ、「動物の世話もあるし、雪が降っても動物園に行きますよ」と真顔で答えたこともあった。

冬季閉園になると時間に追われない分、少し気分が楽にはなったが、お客がいない静かな動物園にしないで物足りなさとともに、言いようのない寂しさも感じるようになったものだった。動物園はお客がいて動物園なのだという当たり前のことを意識し、冬季開園を考えるようになっていた。

秋田での冬季開園の最大の課題は言うまでも

なく除雪だった。利用者がいなくなる公園道路の除雪は動物園の考えだけでは進まず、そもそも動物園の冬季利用者がいるのかという疑問も解決されていなかった。皆で相談し、まずは雪の中で動物園開園の市民意識を探るところから始めてみた。人数限定の参加者募集で「冬の動物園観察会」を行ってみた。除雪体制がない時代、皆で汗を流したのを思い出す。

雪で埋まった動物園に初めて市民を入れたのは平成2年2月のことだった。雪の中で見えるライオン、雪玉をつくりほおぼるチンパンジー、雪をかぶり団子状にかたまるニホンザルたち、初めて見る雪景色の動物園と動物の様子に皆感動の様子、冬の動物園には笑顔があふれていた。子どもたちは元気に雪中ラッセルで遊んだ。

雪の動物園を体験した参加者は、動物と同じ雪と寒さの中、きっと何かを感じてくれていたんだろうと、改めて冬季開園の意義を思った。あの時の参加者の笑顔、今でも忘れられない。除雪などの苦労を帳消しにし、余りある力をもらった。

こうした試行を何度も重ねるうちに冬季開園への理解がしだいに広がり、環境整備も少しずつ進んだ。そして冬季の正式開園の条項も組み込まれた「秋田市大森山動物園条例」が秋田市議会の賛同も得られ、平成17年12月末に施行され、年明けに始まる「雪の動物園」の開園情報が発信された。

そんな記念すべき開園を控えた年末年始の秋田市は例年にない大雪に見舞われ、市内は除雪が追いつかず大変な状況となった。園スタッフ

も開園のため総出で除雪、やっとの思いでオープンできたことを今でも思い出す。

ホッとしたのも束の間、冬季開園は市民からの苦情での幕開けであった。開園後すぐ職員が血相を変え私のもとに「怒った年配の方が電話で園長を出せと言っています」と。電話の主は「こんな大雪で市民が大変な時、何が『雪の動物園』だ!」とえらい剣幕で捲し立てた。その気持ちも理解できるわけで、私は「お気持ちはよくわかります。多くの方が雪の動物園開園を楽しみにもしております。ご理解ください。除雪が一息つきましたら、是非お出かけください」と電話口で何度も頭を下げた苦い経験を今でも思い出す。

挑戦には課題が付き物で、時に折れそうになるが、一方では勇気や力を与えてくれる場面にも出くわすものだ。その一場面は「雪の動物園」を始めた頃に出会った人と動物が織りなす感動的なシーンの中にあった。

すっぽりと雪に包まれ、冬の秋田には珍しい青い空、空気が凜と冷えた開園日だった。正面ゲートからすぐの展示エリア、今はカワウソが暮らす場だが、当時そこには二羽の黒鳥が暮らしていた。冬だというのに原産国の南半球の夏を思い出したのか、恋の季節を迎えた二羽は盛んに鳴き交わしていた。その場面に偶然居合わせた少女とその母が見せてくれたシーンは実に感動的なものだった。

ここでいつものミニ動物学を少々。黒鳥は全身黒色で赤い嘴が魅力的な白鳥の仲間だ。白鳥と言えば冬シベリアから渡って来る白い鳥を想像しがちだが、豪州産の白鳥は全身が黒い黒鳥、南米産の白鳥は首から上だけが黒く体が白い黒襟白鳥だ。南半球の白鳥はなぜか黒色が入る。動物は色の世界でも不思議だらけだ。

もう一つの不思議なことは、黒鳥が冬の秋田で見せる不合理な繁殖行動だ。黒鳥にとって秋田の冬は南半球の豪州では夏の時期なのだ。以

前の12月、メルボルンの夏を楽しんだ時、街の川で子育てをする黒鳥を見たが、冬の秋田での繁殖行動は体の奥底に原産国の季節感がしみ込んでいたのだ。動物にとって最も重要な生命をつなぐ営み、それを司る大事な部分は脳の奥底（下垂体）に組み込まれている。自然の力や作用で仕組まれた営みは、自然のリズムには抗い難いのだろう。

閑話休題、心打たれた母子の会話に戻ろう。少女は黒鳥が鳴き交わしながら吐き出す白い息を発見し、得意満面に「お母さん、お母さん、鳥さん、白い息を吐いている!」と教えていた。そんな少女の感動にそのお母さんは「あなたも、ハーッと息を出してごらん」と応えた。

母に促された少女は懸命に息を吐いた。鳥と同じ白い息になり、自分の吐く息も鳥と同じであることを知りまた興奮。お母さんがさり気なく言った。「いっしょだね!」と。お母さんが発した何気ない言葉、自然な態度に、寒い動物園の中で、私はどこかほっこりする暖かさを感じた。

素直に動物に感動した少女、それに反応し受け止めてあげたお母さん、何気ない日常的な母と子のシーン、二人にとって動物園での大切な思い出になったに違いない。私はそこに何か大事なものがあった気がしている。

四季など変化する動物園の中であって、動物の姿、態度、誕生や老いなど動物は一時も同じではない。それを見る側も、時の変化の中、感性は変化する。だから動物との出会い、感じ方は実に偶然とも言える。時に思いがけなくシンクロナイズする場面にも出会うが、黒鳥と母子が見せてくれた感動的なシーンもまさに偶然であった。その小さなシーンに出会えて私は幸せな思い出をいただいたのだ。

皆で始めた冬季開園はそんな感動的な一コマを見せてくれたし、来園者に大事な何かを提供できていたとすればこの上ない喜びでもある。